

<<ポスター発表>> (9月4日 12:40-13:55)

【8号館7F 871教室】

恋愛小説において物語を特徴づける表現
—タイトルと帯に見られる表現分析の試み—

加藤 祥, 浅原 正幸

読み手に類似していると判断される物語群であっても、語彙が等しいのではない。また、ある物語に特徴的な表現の抽出は困難である。しかし、物語を特徴づける重要な情報は読み手の欲しい情報でもあり、販売を意図する商業目的としても、タイトルとともに読み手の目につく帯に掲載されている可能性がある。本稿では、ストーリーが固定的な恋愛小説のタイトルとその帯情報を収集し、帯に記載されたごく短い文に、その物語に関する情報がどのように表現されるのか調査し、物語の特徴づけに肝要と考えられる要素の抽出を目指した。結果、登場人物属性に関する情報が、主に帯において一・二人称や役割語(助動詞・終助詞)・職業名等のような特徴語を含む発話形式で、凝縮して現れる傾向が明らかになった。また、帯に現れる特徴語は本文の出現頻度が高いのではないが、文書間類似度が高い本文の帯では、同種の特徴語が見られる傾向があった。

<<ポスター発表>> (9月4日 12:40-13:55)

【8号館7F 871教室】

中国人日本語学習者の「ケド言いさし文」の運用に関する調査
—ポライトネスの視点から—

燕 興, 伝 康 晴

日本語母語話者は、日常会話においてしばしば接続助詞「ケド」で言い終わる文を使うことがある。例えば、「会議がもう始まるそうですけど」などである。このような文は一見不完全なのに、情報を伝達する上では完全文と同じ機能を果たしている。普段、日本語母語話者は「察し」を当たり前のこととして受け入れているため、相手の言語化されていない意図を読み取ることができる。しかし、母語話者に相当する言語背景を備えていない外国人日本語学習者にとって、「ケド言いさし文」を適切に使用するのは困難である。本調査では、ポライトネスの視点から、「ケド言いさし文」が有する社会言語学的な効果について、日中間の認識差異を検討した。その結果、中国人日本語学習者は「ケド言いさし文」と終助詞で終わる文との使い分けが問題であり、それにはポライトネス理論でいう「話し手と聞き手との社会的距離」と「聞き手と話し手の相対的権力」が関わっていた。

<<ポスター発表>> (9月4日 12:40-13:55)

【8号館7F 871教室】

依頼表現における呼びかけ語の分析

東出 朋

本稿は依頼表現において、不特定多数の中からある特定の人に対して呼びかける呼びかけ語を中心に、その統語的、意味的条件を解明することを目的とする。先行研究では、呼びかけ語、ハ、無助詞のいずれも何らかの近接性を持っており、呼びかけ語の定義の困難さを示している。①話し手がハを用いずに呼びかけ語として曖昧に提示しておくことは、聞き手に後続発話を主体的に解釈する余地を与え、話し手にとって都合が良い。②呼びかけ語である場合後置が比較的容易であるが、ハで題目提示した場合は後置が困難である。③統語的特徴として、呼びかけ語とそれが動作主体となる命題部分が隣り合っていない場合はハを入れることができない。④発話の意図として、「まさに+Xに呼びかけている」ことを話し手が重視している場合は呼びかけ語として発話されるのに対し、+Xを純粹に命題の主題として提示したいと話し手が考える場合(特に行政の書類等)はハを用いる。

<<ポスター発表>> (9月4日 12:40-13:55)

【8号館7F 871教室】

多言語活動実践「世界へのまど」
—小学生への多言語・多文化への気づきを促す試み—

豊田 美穂, 林 友希, 木原 香菜恵

本研究の目的は、多言語空間や研究授業を通して、公立小学校に通う児童の多言語・多文化への気づきを促すことである。世界には数多くの言語や文化が互いに関わり合って存在していることを学んでもらうために、神奈川県内の公立小学校で、約2年間をかけて取り組んで来た。

小学校の廊下の一角に設置した多言語空間は、児童が気軽に多言語・多文化に触れることができる空間となり、児童の多言語・多文化への気づきを促すと同時に、既に知っていることと知らないことを区別したり、推測能力を育むことができた。研究授業では、41もの言語による挨拶に触れられるゲームを通して、言語、文化の多様性を知るなどの効果が得られた。このような取り組みを広めることで、多くの人幅広い視野を持ち、多様な言語・文化を認めあう社会を実現したい。

<<ポスター発表>> (9月4日 12:40-13:55)

【8号館7F 871教室】

アメリカ英語を起源とする英語イディオムの生い立ち・そのニュアンスと使い方

小山内 大

アメリカを起源とする英語イディオムは概ね18世紀の西部開拓時代から英語圏に広まり始めたが、第1次大戦以来、国際社会での米国の政治的な優位性と共に、アメリカ製の大衆文化の世界的な広がりが米国を起源とする英語イディオムの汎用と密接に繋がっている。

20世紀初頭までは、米国は文化的な後進国と見なされていたが、50年代以降の大量消費社会とテレビ時代の到来と共に、ハリウッド映画・ジャズやポップなど米国発の大衆文化は世界的なサブカルチャーに多大な影響を及ぼして来た。さらにパソコン等の米国主導の技術革新によって、アメリカ発の英語は、既存のイギリス英語に取って代わるスタンダードとしての役割を果たして来た。

本ポスター発表では米国を起源として英語圏で大衆化したイディオムを取り上げ、それぞれの成り立ちを歴史的・社会的な背景と共に説明、さらに細かなニュアンス等を含め、実際のネイティブの使い方を会話文の中で紹介する。

<<ポスター発表>> (9月4日 12:40-13:55)

【8号館7F 871教室】

指示語とジェスチャーが指し示すモノ
—指示語とそれに同期する・しないジェスチャーの関係—

川上 ゆか

話し手は主題となるものを特定するため或いは場所や方向を示すために「これ」や「あそこ」などの指示語と同期して直示的ジェスチャーをすることが多い。これは何について話しているのかを明確にするためになされるが、「こんな」や「こう」などの指示語と同期するのは映像的ジェスチャーが大半である。これは指示語の次に来る発話されるはずのモノの形や動きを表すためになされるが、その発話がなされずにジェスチャーだけで情報伝達が行われることもある。

本発表では会話分析の手法を用い、指示語とそれに同期するジェスチャーの関係とその相互行為における働き、また指示語とは同期しない直示的ジェスチャーの機能に焦点を置き、日本人の1)複数の友人同士の会話、2)初対面の対話、3)学会発表のデータの観察・分析を行うことで、指示語とそれに同期する/しないジェスチャーの指向性について、またジェスチャーの発話促進効果について明らかにする。

<<ポスター発表>> (9月4日 12:40-13:55)

【8号館7F 871教室】

言われのない非難場面における謝罪の意識と言語行動
—ビジネス場面における日本人社会人・日本人学生の比較から—

末田 美香子

本研究では、相手の誤解や交通機関の遅れ等の外的要因に基づく「言われのない非難」に対しても従来の先行研究の指摘のような「日本人は謝罪や配慮が多く、婉曲な言い方が好まれる」という傾向が当てはまるのかという疑問のもとに、ビジネス場面における「言われのない非難」に対する言語行動について、日本人社会人、及び日本人学生を対象に談話完成テストによる意識調査を行った。

その結果、謝罪表現は社会人、学生ともに少ないとは言えず、日本人は謝罪を多く行うという従来の先行研究の指摘が当てはまった。また、社会人と学生の対処法も異なり、社会人は今後の問題の解決策に重点を置く方向で対処するが、学生はお客のポジティブフェイスを最大限に保つ方向で対処する傾向が見られた。

<<ポスター発表>> (9月4日 12:40-13:55)

【8号館7F 871教室】

英語と米語の会話パターンの対照分析
—アメリカ人の埋め草表現の多用—

塚本 亜美

過去に収録した談話を分析して、他の国籍の英語話者と比べると、アメリカ人の方が頻繁にlikeという埋め草表現を使っていることに気付いた。そこで、筆者は集積した談話データの中からアメリカ人とイギリス人の発言を抽出して、両者の会話パターンの特徴を比較してみることにした。likeは話者が発言内容の考えをまとめるための言葉である。原稿に起こした談話を読んで、英語話者たちがlikeをどれだけ使用していたかを調べた。結果を見ると、総体的にはアメリカ人話者の方がイギリス人話者よりも、多くlikeを使用しているが、西海岸出身の女性話者の使用頻度だけが突出している。2013年のワシントンポストの記事によると、likeの多用は「ヴァリーガール」と呼ばれる若い女性に特有のしゃべり方であると指摘がある。したがって米語の埋め草表現の使用には、性別や年代もからんでくることが推察される。

<<ポスター発表>> (9月4日 12:40-13:55)

【8号館7F 872教室】

パブリック・スピーチにおけるエピソードの構築方法の日英語比較研究
—文化によって異なる「好まれる話し方」—

櫻田 怜佳

本研究発表は、TED Talksというスピーチイベントの映像をデータとして、日本語母語話者と英語母語話者(アメリカ人)の行うパブリック・スピーチにおけるエピソードの構築方法を比較し、スピーチにおいて重視される特徴やその背景にある文化的概念を考察することを目的とする。アメリカ人のスピーチは「序論・本論・結び」の三部で構成され、論旨は序論で提示される。一方、日本人のスピーチは「序破急」で構成され、論旨は後半に提示される。日本式の「序破急」の構成は、論旨をはじめに提示する構成を好むアメリカ人から「遠回りで曖昧である」と評価されることが多くある。日本人は何故、序破急の構成を好んで用いるのだろうか。本研究発表では、日本人が重視する「序破急・成就」の概念に触れながら、日英語のエピソードの積み重ね方の相違の根底にある文化的概念を論じた上で、今後日本人が行うべきパブリック・スピーチでの話し方を検討したい。

<<ポスター発表>> (9月4日 12:40-13:55)

【8号館7F 872教室】

英語小説に見られる自由間接話法のコンテキストに関する一試論

溝上 瑛梨

自由間接話法とは、主に小説で使用される作中人物の発話・思考を表象する手法である。先行研究は視点の所在、機能、文法的特徴に注目したものがほとんどで、周辺コンテキストはあまり議論されてこなかった。そこで本研究は、英語小説中の自由間接話法の周辺コンテキスト、主に当該自由間接話法の前文脈の分類を試みた。英語で書かれた小説から自由間接話法部分とその周辺部を抽出し、(a)状況説明、(b)思考・心情、(c)知覚、(d)会話の4つに分類した。この結果を考察すると、(a)以外は発話・思考が表出される作中人物の認知活動が関わっていると言える。認知活動が描かれるということは、その人物の視点に入り、その人物の思考を通して描写するということである。つまり、語り手から作中人物への視点の移動は自由間接話法部より前から始まっているのだ。よって、自由間接話法の視点の決定は、周辺コンテキストまで含めて検討する必要があると指摘できるだろう。

<<ポスター発表>> (9月4日 12:40-13:55)

【8号館7F 872教室】

駅員, 車椅子利用者, 介助者による相互行為における会話進行と参加の組織化

柳町 智治, 稲垣 里嶺, 田実 潔

本研究では, 脳性麻痺の車椅子利用者が駅のカウンターで乗車券を購入している場面を分析する. 分析と考察の焦点は以下の2点である. (1) 駅員, 車椅子利用者, 介助者の3者は, 駅員と車椅子利用者の2者によって乗車券の販売と購入が達成されることに志向している一方で, 駅員あるいは車椅子利用者が相手の視線を得られないことがあると, 手を伸ばす介助者に駅員がお釣りを渡そうとするなど, 会話の進行の滞りを最小限にすることを優先させることがある. (2) 介助者が言語, 非言語行動を通して駅員と車椅子利用者のやりとりに冒頭から参加することもあり, その場合, 駅員は上体と顔は車椅子利用者の方へ向け, 視線だけ介助者に送りながら介助者と会話するなど, 3者による相互行為への参加を調整しつつその場の活動を組織しようとする. 本発表では以上の点について, ビデオデータの文字化資料と画像をもとに検討を行っていく.

<<ポスター発表>> (9月4日 12:40-13:55)

【8号館7F 872教室】

テレビドラマからみた感謝場面における日タイ語の言語行動
—表現の種類を中心に—

KAWEEJARUMONGKOL SALILRAT, 上原 聡

本稿ではテレビドラマの資料を用い、感謝場面における日タイ語の表現の種類の違いを考察した。研究方法としては、日タイ語の意味公式の分類を行った上で、上下関係と相手にとっての負担度による両言語の表現の種類への影響を考察した。その結果、感謝場面において、日本語では、上下関係の影響で、主にネガティブ・ポライトネスが発動され、相手が親しい目上の場合、「すみません」の「恐縮や申し訳ない気持ちの表明」のようなネガティブ・ポライトネスの属性を持っている表現が好まれる傾向にある。一方、タイ語では、相手にとっての負担の度合の影響で、主にポジティブ・ポライトネスが発動され、「感謝の気持ちの表明」、「相手の行為の言及」、「相手へのプラス評価の言及」のようなポジティブ・ポライトネスの属性を持っている表現の種類が好まれる傾向にある。

<<ポスター発表>> (9月4日 12:40-13:55)

【8号館7F 872教室】

相互行為における身体同期・協調のメカニズム
—じゃんけん課題における検討—

児玉 謙太郎, 牧野 遼作, 末崎 裕康, 阿部 廣二

本発表では、マルチモーダルな相互行為における参与者間の身体同期・協調のメカニズムを検討するために実施した予備実験の結果を報告する。本研究では、身体同期・協調のメカニズムを巡る2つのアプローチの仮説を検証するため、実験課題として“じゃんけん”を用いる。じゃんけんでは、参与者の発する音声を聴く、身体の動きを見る、といった視聴覚情報を利用し、行為の最終段階で身体を同期させることが前提となっている。個人間での身体同期のメカニズムを巡り、近年、心理学・認知科学分野では認知的アプローチと力学系アプローチによる議論が展開している。本研究では、行為の過程における参与者間のリアルタイムの相互作用の存在に着目し、実験的統制、身体動作の時系列解析を用い、少数データでの事例的分析を行った。その結果、参与者間で知覚情報を介したリアルタイムでの相互作用が存在し、身体の同期・協調に影響を及ぼす可能性が示唆された。

<<ポスター発表>> (9月4日 12:40-13:55)

【8号館7F 872教室】

漫画から見た日本語とタイ語の自称詞の対照研究
—役割語における一人称代名詞を中心に—

SIRIACHA ROYKAEW, 上原 聡

本研究は日本語原作の漫画とそのタイ語版を資料とし、役割語を中心に日本語の自称詞がどのように訳されるのかを調べ、両言語の自称詞の共通点と相違点を分析した。その結果、自称詞のうち一人称代名詞については、日本語では、話し手のイメージによって一人称代名詞が変わり、典型的な役割語が多い。これに対し、タイ語では時代、性別を区別する一人称代名詞があるが、日本語ほど「役割語度」が高くなく、典型的な役割語が少ないと分かった。また、両言語とも、親族名称を自称詞として使用できるが、日本語では下位者である聞き手が成長すると、話し手はそれに合わせて親族名称の代わりに代名詞に移行する傾向があるが、タイ語では聞き手の年齢を問わず、親族名称を自称詞として使用できるため、タイ語訳では日本語原作より親族名称が使用される傾向がある。

<<ポスター発表>> (9月4日 12:40-13:55)
【8号館7F 872教室】

国会における首相発言の形式的特徴の分析

唐 麟源

言語表現の安定性が損害されている昨今、言語コミュニケーションに関する不安を緩和するために、言葉はどのようにして安定性を維持できるかという問題を検討する必要がある。ところで、安定性を検討する前に、その言語表現自体は如何なるものかを知る必要がある。そこで、制度上に最も安定性の高いものであるべき自然言語表現であり、かつ大量に利用可能な言語資料である首相による国会発言に注目する。国会会議録に対し、形態素解析を行い、首相それぞれの発言の基礎統計量と語彙の豊かさを計測し、それらの指標の経時推移を観察する。(1) 発言形式には特徴が存在するのか、(2) 特徴が存在するとしたら、それは議会制度がもたらしたものなのか、(3) 特徴は首相間共通なのか、それともそれぞれ個性を出しているのか、といった点を解明することにより、首相の言語表現の安定性を検討するための土台を築く。